淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三五二號
昭和二十五年九月廿五日印刷　昭和二十五年十月一日發行

第十六巻　第十號

十月號

沓掛山莊記　吉田紘二郎
佛を迎えるまで　江上秀静
淨摩尼の珠　佐藤賢順
拜む人拜まれる人　藤井實應

1950　10

幸福と信仰

人の幸福は健康にめぐまれ、お金があり、好きな職業に従事し、家庭圓滿で、更に近隣の人々や、知人朋友がよい人である等、いろいろ條件があり、いづれも大切なことであり、これをおろそかにしてはならない。しかしそれが、みな揃つているという人は、おそらくはないであろう。あの人は幸福だ、といわれている人も、その當人に聞いてみれば、いろいろな苦しみ、惱みはあるものである。

どんな苦境逆境の中にあつても、その中によろこびを見出し感謝の心を以て敢然と眞實を求めてつき進む人がある。それは信仰の人である。信仰の人はたとひ苦しみとほし、なやみとほすようなことがあつても、眞實を求め、眞理に隨順して進むから、その中にも一つの安らかさ、明るさ、幸福さを味うことができる。

ふきすさぶ浮世の風は强くともわれは如來のふところにすむ
かぎりなき惠みの中に今日もまた生くるうれしさなむあみだぶつ

智慧と慈悲のみ親に在す阿彌陀如來のみ名を稱えつゝ、すべてをさゝげて、そのみ惠みの中に住む人は、苦惱多き人の世にも、明るくつよく生きてゆくことができるのである。

目次

拜む人拜まれる人……藤井實應（21）
一枚の紙……寶田正道（14）
新興宗教……（13）
佛を迎えるまで……江上秀靜（10）
沓掛山莊記……吉田絃二郎（2）
他力念佛……伊藤康安（1）
善と惡……中野赳子（8）
老婆、念佛、子供……須藤隆仙（18）
熊谷發心……（17）
淨摩尼の珠……佐藤賢順（4）
芝園たより

他力念佛

——和語灯錄による——

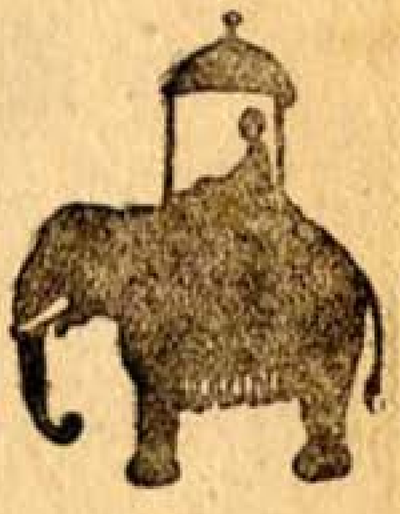
伊藤康安

みづからの　力をもちて
ことさらに　唱ふる念佛
往生の　因とはならず
阿彌陀佛の　誓ひにまかせ
おのづから　いでくる念佛
往生の　正因とこそなれ

他力なる　念佛といふは
他し業　みなうちすてゝ
ひたすらに　名號をばとなへ
ふたごころ　なきをいふなり

罪ふかき　愚のわれも
一聲の　念佛によりて
彌陀います　御國に生る
一聲に　生るゝわれら
百千聲　あまたたびせば
何しかも　生れざらめや

（筆者・早稲田大學教授、國文學科主任）



沓掛山荘記

吉田絃二郎

八年振りで信濃の高原の朝夕を送つてゐる。自分ながら奇蹟のやうな氣もする。

東京の書齋にゐる時は椅子から立ち上がるにしても人手を借りなければならぬほどの不自由なからだではありとてもふたゝび信濃の山を見る機會とてはめぐまれないであろうと諦めてゐた。

ところが夏の初めのころであつた。信濃の友人から山荘の疊も入れた。（終戰直後疊は全部盜まれたのであつた）坐ることのできないわたくしのために椅子も準備したといふ消息があつた。

「信濃の山荘に行つて見よう」と先づ友人の親切に心を動かされた。

次の問題は玉川から上野驛までの自動車であつた。これも親切な主治醫さんの手で都合よく行つた。上野驛に着くと、にはかに腹痛を起して前途を思ふて心細い限りであつたが、これも見送りに來てくれた看護婦さんに、藥を買つてもらつて、間もなく落ちついた。坐席のことも心配であつたが、驛の人に事情を話して腰かけることができた。汽車自動車の乘り降りは全部仙女とその弟が介けてくれる。汽車が沓掛に着くと友人がプラットフォームに待つてゐてくれて、山のいたゞきの山荘まで自動車を飛ばしてくれた。

かうしてわたくしはともかく落葉松山の山荘の人となることを得たわけである。考へて見ると、わたくしは徹頭徹尾、人のなさけによつてこゝまでやつて來ることができたのであつた。

書齋の中では一歩の身のこなし方にも不自由さをきはめてゐるわたくしが、淺間高原の山荘に起臥しつゝあることを聽いては、おどろきの手紙を寄せて來る友人もある。

ともかくわたくしは人々の親切となさけにたすけられてこゝまでたどり着くことを得たことを思ふ時、人生に對して溫かいもの、明るいものを感じないではをられない。

山莊に來て、わたくしは幾人かの舊知の世を去つてしまつたことをしみじみと感じることもある。いつも落葉松山の中で、金泥群青の色彩もあざやかに佛さまの繪を描いてをられた荒井寛方さんも今はすでに故人になられた。

しかしそこにはまだ幾人もの舊知の人がある。山のいたゞきまで豆腐をかついで來る男、林檎屋の老人などは遠い旅からでも立ちかへつて來た友人を迎へるやうによろこんでくれた。

二三日前、わたくしは二通の郵便を投函してかへつて來た。すると翌朝沓掛の配達さんがやつて來て「あの二通の郵便物は切手をお忘れになつてゐましたから局の方で立て替へて切手を貼つて置きました」といふことであつた。

こゝにも昨今の東京などでは、ゆめにも見られない人間の美しい心が感じられる。

毎朝、薄暗い中に起きてわたくしは山徑を下つて溫泉に行くことにしてゐる。溫泉を出たところに小鳥の小屋があり、中には七八羽の小鳥が飼はれてある。あをしとゞや山がらのような小鳥であるが、内にちよつと翅に黄色の斑がある二羽の小鳥だけは番ひであるらしく、いつも同じ枝にとまり、見てゐるとお互に可憐なくちばしで愛情を示し合つてゐる。ほゝ笑ましい朝の美しい表情である。

このころは渡り鳥がやつて來る。

或る日一羽の渡り鳥が山莊の硝子窓に打つ突かつて死んだ。

その渡り鳥の番ひなのであらう。一羽の渡り鳥は日の暮るゝところまで、窓に近く來て、かへり來ぬ友をさがしては鳴きつゞけてゐた。

その翌日もまた一羽の渡り鳥は硝子窓に近く來ては、胸をしぼるような聲で鳴きつゞけてはかへり來ぬ友をさがしつゞけた。

そんなことが五六日もつゞいてゐる間に、山は寒くなり、渡り鳥の群も何處かへ行つてしまつた。

孤獨になつた小鳥は、渡り鳥の群といつしよに遠い旅をつゞけてゐることであろう。

淨摩尼の珠

法然上人法語私釋（七）

——心の水おのづから淸くなりて往生を得るは念佛の力なり——

佐藤賢順

淨摩尼珠という珠を、濁れる水に投げれば、珠の用力にて、その水、淸くなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて、濁れることかの水のごとくなれども、念佛の摩尼珠を投げれば、心の水おのずから淸くなりて、往生を得ることは、念佛の力なり。わが心を沈め、このさわりを除きてのち、念佛せよとにはあらず。（十二箇條問答）

これは念佛の力を淨らかな摩尼という珠に譬えたお言葉で、數々ある法語のうちでも、特に巧みな譬を用いてあります。摩尼は如意寶珠などゝ呼ばれる貴い珠で、この珠を持つていれば、火に入つても燒けることがなく、水に入つても溺れることがないと傳えられ、また、たいへん美しい水精の珠であるともいわれています。上人は、曇鸞大師が「往生論註」で如來の名號は無上寶珠の如しと述べられた一句から思い着かれたのでしょうか。お經や法語ではよくこういう素朴で卒直な譬諭を使つて、深い境地を表わしていることがあります。

この一句は、或る人が、「世を捨てゝ隱遁生活でもしている人ならば、ひとすじに念佛しますから往生することも易いでしょうが、私どものように、朝にも夕にも、身に營むことは名聞、昨日も今日も、心に思うことは利養ばかり……。このような生活をしながら申す念佛は、いかがでしょうか。み佛の御意にかないますでしょうか。」

とお尋ねしたのに對するお答であります。宗教は特別に優れた人達――階級からいつても教養からいつても素質からいつても――にだけ許された特權であるかのような先入主が、深く誰の心にも食い入つていた頃であつたから、こういう疑いの起るのは當り前でありました。如來の本願を信じて、南無阿彌陀佛を唱えるだけで救われるなどとは、容易に信じられなかつたのでしょう。

その身そのまゝでよろしい、特別に衣服を改めて他所行きのつくろいをするには及ばない、朝夕の營みの外に、別に宗教生活というものがあるのではない、この貪りや愉しみに追い廻された痴けた日常生活に浸み透つた宗教でなければ、ほんとうの宗教ではないのです。念佛はそういう愚かな日常生活にあつて、恰かも摩尼の珠が濁れる水を澄ませ清める如く、だんだんに人柄を清め高めてゆくものであります。

尤もその念佛が一向に日常生活に力を現わさないばかりか、却つて逆に、念佛をしながら、だんだん心が曇つてくることがないとはいえません。落語に「こごと念佛」というのがありますね。佛壇の前で念佛を唱えながら、合間あいまに、家の者に對していろいろの叱事をいうのですが、とうとう終りに、外を通るどじよう賣りを呼び止めさせてどじようを買わせる、そして「あとでおれが殺して料理してやるから」という落ちになる笑い話ですが、現實にもこういう話がないわけではありません。しかしこれは念佛がほんとうの力を現わさないのではなく、こういう人達の念佛はほんとうの念佛ではない、ただ習慣的にか形式的にか口先で唱えているだけで、少しもその人の心に內在していないのです。深い信心から唱えられる念佛ではないのです。だがそのような念佛でも、聲の力で、いつかは人々を目醒ませることがありますから、無下に捨て去るには及びません。

ところでこの法語は單に個人の日常生活における念佛の貴さを說かれたものですが、念佛の働きはそのまゝこれを社會人としての個人の生活に、すなわち社會生活に當てはめてみて、一層の貴さを增すのであります。大體、上人の法語には社會生活や國家生活のことを明らさまに述べた言葉はありません。それどころか信仰生活を個人の心の事柄として取り上げられて、むしろ社會生活や國家生活から切り離されている傾きさえあります。近頃の合言葉でよく言われる「宗教は單獨者としての人間の主體的事實である」ということを、はつきりと見拔かれていたのです。鎭護國家の三部經と淨土の三部經とは違う、ということをはつきり言われた見識は、當時として、すばらしかつたと思います（選擇集）。しかしそれはそれとして、人は個人として生活する他の一面において、社會人として共同の生活を營

みます。信仰はただ個人としての心の事實として、その人を淸め高めるだけでなく、また社會的事實として、强く社會生活に働きかけ、社會を、集團を、淸めてゆくのでなければなりません。上人のお言葉に社會や國家を表わした言葉のないのは、決してこういうことを忘れているのではなくて、一つには、鎭護國家だの何だのと、政權や慣習に形式的に妥協していた舊佛敎に對する反撥もありますが、また一つには、社會というものが今のような、はつきりした法制的、經濟的な集團でなく、せいぜい同行衆というような信仰を等しくする心の友の集りにすぎず、特に意識的に取り上げる社會がまだなかつたからでありましよう。今としては、しかし、摩尼珠としての念佛の働きは、個人に對してよりは社會に對して、その强い力を發揮するのであります。

終戰後の社會は各方面で相貌を一變しましたが、最も激しい變り方をしたのは、社會生活の倫理的基準であつて、古い親子、主從、夫婦の間の道德は、みな封建的という一言の下に捨てられてしまいましたが、まだ新しい民主的な道德はなんら確立されてはいません。ただお互が民主的という美名のもとに、お互の欲求を勝手氣儘に押し通し伸し歩いているだけで、他人の要求については一向に顧みない。自由、自由と口では立派な題目を唱えるけれども、それは自分だけの自由であつて、逆にそれだけ他人を束縛することです。人權の尊重という言葉は、ただ自分の權利を尊重するに都合よい言葉として使われているというのが現狀です。戰前にはどことなく處生觀にゆとりがありました。餘りあくせくしないで、生活に足りることを知る一線を劃して、それが守れれば敢えて他人を損い傷つけてまでも我欲を通して貪り搔き集める要はない、その邊で人生を愉んでゆこうという氣持がありました。ところが戰後は一變して、戰爭中の差し迫つた氣分をそのまま持ち越して、顧みてはいられない、他人のことなど食うか食われるかだ骨までしやぶつてやろうという凄じい殺氣が誰の目にもみなぎつているではありませんか。

手近かな例ですが、私の寺の周圍の土地は戰時中の强制疎開で家はすべて取り毀わされて空地になつていましたが昨年あたりから急激に家が建ち始めました。戰爭前には家を建てる場合には、豫め兩方で立合つて、境界をはつきり定めて、兩方が納得した上で、自分の地所內で纒まるように建築するというのが常識でした。ところが近頃はそんな「中世紀的な」手續きを取る人は一人もありません。どこで木を組んでくるものか、こちらの知らぬうちに一夜にして建前を完了してしまいます。そして自分の地所には廣く空地を取りながら、申し合せたようにこちらの地境を乗り越して、たとえ一寸でも二寸でもよい、雨落ちを出してやろうというのです。人間の貪りの根性はきたないもので、

砂一握みでもよいから一日のうちに一度、他所から持つてこないと氣の濟まない根性の人が、以前にもあつたものですが、戰後は誰も彼もみなそんな人間になつて、鬪鷄のような氣構えで暮しているのです。

こういう時に、信仰こそ摩尼珠であります。何事も佛の導きの力、救いの力として受けとる宗教的な生き方こそなごやかさをもたらすものです。宗教は足ることを教え、他人を生かすことを教えます。

信仰が根本になつて、そこから倫理が生れます。宗教が始めです。現代の倫理の混亂は宗教がないからです。宗教に基かない倫理はいつまでたつても社會を清める力とはなりません。

法律や政治も社會を清める摩尼珠ではありません。それどころか政治は、現代のわが國では、いかに多く社會を毒しているかを考える方が話題になります。法律は社會を規制し指導するもので、法律なしには一日も社會の秩序は保てませんが、決してそれにも絶對の信頼は置けません。例えば三鷹事件の判決ですが、あれについてはいろいろの議論がありますが、法律家の言う通り最も法に忠實な名判決に相違ありますまい。法というものを重んじ、忠實に法に從う限りあの判決は正當でしよう。しかし被害者の一人の遺族が言つていたように、あれだけの事件が一人の犯行で起きるはずはない、事件直後の情勢からいつても多數の意思が動いていたことは間違いないと考えられます。そこに何か納得のいかないものがあります。しかし法文というものは、そうした動く意思などを把えることはできない。法に忠實である限りは猶更そんなものに觸れるわけにはいかない。法の不備ということをよく言いますが、法律にはどこか途切れているところがある。現實の社會は連續して動いているのに、法律はそれを切り離して把えようとする、切れ目と切れ目とを繼ぐものがないのです。それは法律の不自由とも限界とも、または宿命ともいえましよう。そこに宗教や倫理と、法律との距離があるのです。

賴りになるのは信仰だけです。深い信仰が人の心を清めるばかりでなく、世の中を清めるものです。もし眞に正しい信仰生活を續ける人が一人あるとすれば、淨摩尼珠を濁れる水に入れたように、社會はその人の周圍から次第に澄んでゆきます。

善と悪

中野尅子

牛肉を頭の上へ載せて歩いたッて腹はふくれぬ。牛肉が悪いのでない、コレを喰つてコナさぬから悪い。

佛教は六ッかしいから悪いと云う、佛教が悪いのでない。これを喰つて咀嚼せぬから悪い。固い肉でも、タタいたり、フライにしたりして喰べりや、年寄りや子供にでさへ榮養になる。喰つて見ない癖に、臭ひを嗅いで通つた丈けで、支那料理は嫌いだ、生臭さは嫌いだとコゴトを云つている。

お金だつて悪銭だと云うが、金が悪いのでない、お金は社會事業や、よき商賣をやるが爲めには尊き資本であるが、道樂息子に持たしたら悪銭です。夕食後、寝る前になつて、御馳走を貰つて、ウンと喰つて寝たら翌日はビー〳〵と腹下り

「エイ、馬鹿を見た、いらぬ事に澤山御馳走を持つて來る奴があるものだから、喰い過ぎた」

と云うて怒る。御馳走を持つて來た人が悪いのではないのです。自分が喰い過ぎねばいゝのです。それをいつも他人が悪いと思つている。

針はお裁縫する道具であるのに、コレで人の心臓をズブリとやつたら凶器です。而し針

如是語録

若し人善根を種えんも、疑ふものは則ち華開かず、

信心清淨なるものは、華開いて則ち佛を見たてまつる。

◇

一切諸々の世間において、生ける者は皆死に歸す

壽命無量なりと雖も、かならず盡くることあり

それ盛んなるものは必ず衰ふることあり、

あひ會へるものは別れ離るゝことあり

壯年も久しくとゞまらず、盛色も病に侵さる

命は死のために呑まれ、法として常なるものあることなし

◇

妄語は第一の炎なり、尚ほよく大海を燒く

況や妄語の人を燒くこと、草木の薪を燒くが如し

◇

はそんなことに使うべきものでは無かつたのです。そんな風に使う人が惡い。ピストルは警官が常に白晝公々然と携帶して居られる、そして萬已むを得ない場合犯人をドン〳〵とやつて殺人しても、罰にはならぬ、時によつては賞與が出るのです。よき人によつて、良く用いられた場合は凶器も凶器でなくて平和への武器です。そう云う意味に原子爆彈も使われねばいかぬ。毒藥が適量に用いられた時、最上の特効藥であり、高貴藥も分量を誤り間違つて使えば殺人も、自殺も出來る。

總て世の中に「惡い物」は一つも無いのです。コレを良く用いぬから惡いのです。善用したら、皆、良くなる。

敗戰でも、金詰りでも惡くない。コレを動機として、直ちに良い方へ轉化したら、其時から良くなる――良くして〳〵、常に良くして行けることが信心です。

劇藥を良藥にするように、爆彈で破壞してトンネルを掘り進んだら、ドン〳〵工事は捗るように、惡物をも、良い方へ善用するのです。善用する善の魂が出たら、總て惡人も惡材料も皆良くなるのです。善の効用、善心の目覺めが無いから、悉くが惡用せられ、惡材料になつて居るのです。本來「惡」と云うものが有つたのでなくて、本來は「善」と云わるべきものが根柢に動いて居るのです。

此の「善」なる心を呼び覺ますことが上手になれば、行詰りが打開され、明るくなり、幸福になる。善の心とは良き觀方と良き働きです。良き見方というのは綜合的、統一的圓滿な見方です。即ち物を素直に全體的に見ると、部分的な極端な見方が無くなるから、謬りがなくなるのです。誤りが無くなれば、必ず「働き」がよき作用となる。

汝地獄の釁を開き、すでにかくの如く怖るくが如し
何ぞ況や地獄に燒かるゝは乾ける薪草を燒くが如し
火の燒くは是れ燒くに非ず、惡業乃ちこれ燒くなり
火の燒くは是れ滅しうべし、業の燒くは滅しうべからず

◇

慈みの心をもて一人に施さば、功德の大なること大地の如し
己がために一切に施さば、報を得ること芥子の如し
一人のこまれる人を救ふは、餘の一切の施にまさる
衆星は光あれど、一の月の明らかなるに如かず、

◇

若し能く自ら身を安め、善き處に在るを得ばその後、餘人をも安めて、ともにその利を同じうせよ、

佛を迎えるまで

―二灯庵雑記―

江上秀靜

「京都へお出かけなさいますとか聞きまして、お願に上つたのです。手前方佛檀の本尊さまをお迎えしたいと存じます。ご面相のよいのをおたのみいたします」

私が旅立つ一日前に尾方さんのたのみでした。値だんは幾何位のおつもりですかとたづねると「まあ○○圓位のところ」とのことでした。

お節句の雛さまでも千圓二千圓する今時です。それもたゞ一日飾るものとはちがい家代々拜むのであります。「少々は奮發しなさいよ」と笑いながら申したことでした。

それから京へ着くなり數多い佛具屋さんをたづねて見ましたが、どうも氣に入つたのがありません。氣に入つたのは値だんがまづ一萬圓近くです。安いのは商人は名古屋物と申して、京出來と區別して説明して居ましたが粉飾で胡魔化したような、平凡な品物にしか見えません。螺髪も縱横に刀刻を入れたものでした。ぢつとお姿を見て居ると信仰の對象として拜む氣になれません。その時偶然にもさるお寺の老師にお會いする機會がありました。

老師は、自分ご一躰所持して居るが、喜んで拜んで下さる方なら手放してもよいとのこと。老師をおたづねしてその佛様を拜見させて頂きました。そんなに古佛と云ふほどでなく、傷み汚れもなく、そして端嚴なご面像でありました。これは一見して、品物の感じでなく、拜む佛さまのお姿でした。

私はかねてから佛教徒の家庭佛に不審を懐いてゐましたことは、日本に多くの家庭に佛檀がありながら、その本尊に對する觀念の缺けてることであります。たいていの家が鼻の缺げ、指の折れ、虫の喰つた、そして後光のないのや、蓮臺の壊れたのや、又お粗末な鑄物や、原始的な彫刻や、そんなもので滿足して居ることであります。本當に拜むなら調うたものが欲しい。ありがたいお

姿が欲しいと思いました。また商人にしても大量製作するのですから、可成需用は多いものと思いますが、これは信仰の對象であればていねいに敬をこめた製作でほしいと思います。又買求める方もも少し眼を開けて拜んでほしいと思います。古人の一刀三禮の作が本當でありますが、そこまで行かなくとも、その心は學んでほしいのです。何と變な本尊の澤山あることか。これは佛敎徒として恥しく思います。私はとう〱佛さまを買はずに歸りました。歸つてから尾方さんに云つて、京の老師の所有せられる古佛を頂くことをお勸めしました。

やがて佛さまがお着きになり、いよ〱尾方家の本尊佛として入佛の式がありました。ご家族の方も、親類の方も大へん喜ばれました。これで家が固まつたといふものだ、家庭に精神が打込まれたのだと云はれました。

尾方のお父さんは永らくアメリカの本土で働いた人であります。善良無口で實直な方であります。お芝居や、淨るりを見きゝする位の道樂が關の山、酒も、煙草も用いぬ方であります。アメリカでの前半生の働きが身代であります。家屋敷を買受けて、そこに新築されたのが今の家です。立派な家、きれい好み、誠實な行き方が田舍には却つて商賣繁昌の因ともなりました。

晩婚でもあり子供なしで、先年男女共に養子されて、これも上首尾であつたのが、この若夫婦に子供欲しさの心遣ひから嫁も婦人科に入院させて手術をさせられました。これが一つの悲しい運命のほぐれとなつて、若嫁さんは手術の後はかなくも死んでゆかれました。ほんとに思いかけない出來事です。そして今年が初盆であります。こゝまで來ると、この家に佛壇と、お位牌、佛さまと、にわかに新調せねばならぬことになり、これが佛さまをお迎えする因縁事となつたのであります。

勿論、佛壇をまつることは平素の大事でありますが、因縁が來ないと實現されないものであります。佛さまを拜がむことに至るまでの因縁を考えて見ると、一家の創建一代の歴史であります。或は何代も續く昔からの所謂「家柄」にも封建的な背景から、新時代への移り、かれこれうかゞわれるものもあります。殊に佛中心に佛壇中心に來つた日本の家庭精神には色々なことが考えさせられます。佛壇の有無、佛壇の良し惡し、佛壇の掃除、供養の屆き方、そこにも家の樣子がうかゞはれます。佛壇によつて統一された家庭の信仰や、住む人の心の向き方も知られます。

敬愛せられる人の死んで行かれた後のみじ目さは、昔も今も世界中の悲劇であります。月日のたつ内に忘れられると申しますけれど、この悲しみは忘れられないがよいと思います。亡き魂と共々に語つて、共々に生きる力を持つことは佛壇を通じての私たちの信仰であります。

尾方さんにはその後、若い美しいお嫁さんが見えました。家の淋しいのと、忙しいのと、いづれ迎える妻であれば早目に——といふ親御の親切さであります。こんど來られた嫁さんが又よい方で前に死なれた嫁さんの供養事は、毎日のお水、お花から、命日のまつりごとまで、よく屆いて親切なので、ことにお母さんは涙の種です。

私は曾つてある方から聞きました。新しい嫁は前の嫁の代りではない。同じ一人である。前の嫁が生れ替つて來たのだ、決して別なものではないと云はれました。今度來た方はその方でなければならぬたゞ一人の嫁さんであります。それはお信心する人によつて早くも合點の行くお話でありました。

先々月の「淨土」でしたか、吉田絃二郎先生の開眼のお話がありました。夫婦はお互に眞實の眼を開き、この眞實の眼で見合ひ、うなづき合つて二つを一つにした生きる道を見出すこと、それはこゝの佛壇を拜むことによつて實現されるのですとの話も出ました。ありがたいことです。親も子も、夫婦もみんな別々のものが一の因緣の上に集められ、一つ命の上に結びつけられたこの尾方さん一家の、この佛間の入佛はほんとに新築の家の入魂式であり、入佛式であります。

あるお年寄の方は云はれました。家を建てたら家の中心が大事だよ。兩親が家の中心であると思ふことは封建的に傾き易いが、宗教の信仰を家の中心とすることで働く力が涌いてくる。佛壇はこの意味で懺悔と精進の源泉であり、和敬と不退との原動力である。日本の佛壇を道具のごとく思つてはならぬ。思想と信仰の根本に考えて貰いたい。それを形に表現したものであるから建築の中心、即家庭の中心でありたいと云はれました。

尾方さん親子はこれで一生一代の締め括りをしたというて喜ばれました。優しい思い遣りのある眼差しで佛前にお燈明を上げられます。若主人も夫婦も美しい魂があの月光の流の中に快く端座する姿、その純淨なものを二人の上に取交はしつゝ佛を拜し居られます。

年始用の施本おすゝめ

年頭の布教第一歩は、本會發刊の施本用「新淨土」を活用あれ。形式、內容ともに新年にふさわしく、念佛信仰を中心としてひろく一般に佛教信仰をたかめてゆくに、最良好適の年始向施本、

即刻申込下さい。部數明記のこと。

十二月上旬より發送します——一部三圓の豫定、

送料實費

新興宗教

新興宗教の騒がれだした手初めは、璽光尊事件だつたが、アレが問題になつたキッカケはあの頃の物資統制違反だつたと記憶する。熱海のお光さまが、ニュース面に登場したのは脱税問題だつたと思う。こんどの靈友會も脱税容疑から始まつている。脱税でやられたのはまた横濱の皇道治教というのもあつた。

こう考えてくると、いわゆる新興宗教は、一ころ流行つた新興財閥と同じであり、ボロイ企業であり、いかに大きな金を握つているかゞ分る。右翼團體といわゆる政治屋の金穴は、いまや密貿易と新興宗教とである、とまで一部では言われている。

◇

どうして新興宗教に金がだぶつくのか。彼等のカンバンが、手つ取り早く人間の現實面における弱點にマッチするからである。曰く治病、曰く開運、等々。

戰後社會の混亂で人々が心の平衡を失つていると、大きく言う程もない。いつの世にでもある。—病氣が思うようになおらない。事業がうまく行かない。そうしたことから起る家庭の中の小さなイザコザは、新興宗教にとつては恰好の餌である。少し冷靜に考えればすぐ解ることでも、誰かに賴つて方向づけて貰うと安心がゆく人間心理、知人や先輩などの合理的な注意よりも、相性だ、生れ月だ、何だと、簡單にしかも全然別の規準からものを言つて貰う方に傾く精神偏向、佛教やキリスト教の、ほんものの宗教をじつくりと胸にしみ込ませるなどは面倒で、もつと手つとり早く幸福になり、商賣繁昌をのぞむお手輕主義數えれば切りがないが、こうした人間心理がセッセと通つてゆくからである。そして彼等の巧みな收金網にかゝつてゆく。カスミ網はカスンだ眼には見えない。

◇

戰後の宗教團體の增加率はすさまじい。文部省宗教課では三日に一件づゝの勘定で、新宗派の届出があるという。戰爭直後には、神佛、基あわせて四十四教團にすぎなかつたのが、最近では四百八十餘と、凡そ十倍以上にふくれ上つて、この宗教インフレは未だにその加速度をゆるめてはいない。

新興宗教を地方別にみると、東京の一一四を筆頭に、京都、滋賀、大阪、靜岡、神奈川といつた順になつている。普通にはこうしたものは農村などに多いかと思い易いが、實情はむしろ都市近郊の中產階級に大きな地盤があることが判る。

そうしたむしろ教養があるはずの中流社會層の親たちが、あちらこちらの生神さまや、占いの「治病、開運法傳授」のカンバンにせいぜい釣られている間に、その子供たちは—これまた物ごとへの正しい批判力などは養なわれる筈もなく—盲目的に、狂信的に、アプレゲールの惡流の中にとびこんで混亂の渦をかきたててゆく。新興宗教を支持する現實の層を考えると、フッと首すぢの寒くなる想いがする。

＊　＊　＊

一枚の紙

寶田正道

つい最近の『夕刊朝日』にこんな記事が出ていた。讀んだ方もあると思うが、なんでも英國の一流出版會社と業務上の通信を交換した人からきいた話として、先方からくる手紙の封筒が、印刷濟みの紙を裏返して使つてあるのにひどく驚いたり、感心したりした、というのである。

しかし、これはなにも英國の出版社だけではなく、アメリカでさえこういうやり方で通信をよこす場合がある。といえば、世界一の富を誇るアメリカが、そんなケチくさいことをやるものか、と疑う人もあるか知れないが、事實、私は最近ニユーヨークの『サイエンテイフイツク・アメリカン』という科學雜誌社について、このことを實證したのである。私は或る出版社に勸め、多少畑ちがいではあるが、Sという科學雜誌の編輯にたずさわつている關係上、『サイエンテイフイツク・アメリカン』社とは、毎月雜誌の交換をしているが、はじめて向うから雜誌を送つてよこした時、その包裝が一度使用濟みの紙を裏返して使つてあるのに、實は多少の侮辱を感じたのである。敗戰國で、而も第四流の乞食國におちぶれた日本の出版社など、先方から見ればどうせゴミ箱かハキ溜めみたいなものであるかも知れないが、それにしてもあんまり人をバカにしたやり口ではないか、と一應は力んで腹を立てたものの、どうしようもない。しかし、よく考えてみると、これは敗戰國民らしいいじけたヒガミであつたことが、すぐ後でついた封書によつてよくわかつた。それは同誌本文の邦譯許可願いに對する快諾の返事であつたが、用紙といい、文面といい、流石に文字通り紳士が紳士に對する親愛と敬意に滿ちた丁重極まる一文であつた。それを讀むと、相手が人種勝敗の如何を問わず、常に對等の人格づきあいをしていることや、また一面識さえないこちらに對していかに誠意ある待遇で臨んでいるかがよく判るのである。私は、自ら一時でも相手の眞情を疑つた不明を愧じ、且つ心で詫びたのであるが、それにしても、持てる國アメリカの一流雜誌社が、どうしてこんな節約をしなければならないのか一寸解せない。或いは英國の場合と同じく、個々の企業體が、その採算をよくするために圖る經費の節約が、おのずから國際貸借改善の方向に進めてゆく、という經濟原則を、アメリカ人自身で體得實踐しているのかも知れない。

それはともかく、アメリカさえ（アメリカなればこそといいかえた方がいいかも知れない）、こんな調子で、萬事にこまかい節約をし

ている時、一歩ふり返つて日本の現狀を見ると、全くお話にならないほど、濫費また濫費の連續である。いや、濫費するほど物が豐富にある國ならばそれでもよいが、敗戰後五年、今日といえども、決してわれわれが樂に生活できるほど物資が安く出廻つているわけではないから、それはむしろ喰い意地の張つた乞食國民の虚榮心から出た俄か成金か大盡根性の然らしめるところという方が適當であろう。

人間は腹が減るととかく喰いすぎたり飲みすぎたりして吐き出したりすることが多いが、これは確かに食物のムダである。ところがこの頃の日本人は殆んどこの類である。出版社にしたつて、終戰前後は紙が足りなくて、ヤミ紙の奪いあいを憚るところなくやつたものであるが、最近は讀者の購買力もなにも考えることなく、一寸紙が豐富に出廻るというので、世の金詰りや不景氣をよそに、昔に近い大冊、増刷で、どんどんやたらに紙を使う。それが消化しきれずに返本の山となつて歸つて來ても、これを少しも紙の濫費とは氣がつかないらしい。ノド元すぎれば熱さを忘れるというが、戰時中の苦しい經驗などどこへ忘れたか、この頃は原稿用紙といい、便箋といいちよつとしたメモの用紙に至るまで、なんでもパリッとした新しいのを使わないと氣のくわぬ癖が、一般にまい戻つて來た感じである。新聞社や出版社の紙屑籠を一目見れば、その證據歷然たるものがある。まして昨今、昔ながらの射倖的浪費戰術を復活し出した廣告用のビラやチラシを、二度の御用に役立てようなどという殊勝な心がけの仁は、先ずないといつてよかろう。

ところが、それについてこんな話がある。

まだ太平洋戰爭に突入しない頃の話であるが、その時分私は大學を出たばかりで、研究室の副手を命ぜられ、研究のかたわら、『淨土學』という季刊學術雜誌の編輯にたずさわつていたことがあつた。

或る時、原稿を割付けしようと思つて、澤山の集まつた原稿を調べていると、中から風變りな原稿が一つ出て來た。それは、丁度その頃亡くなられた、淨土宗の文獻學者中野達慧という人の書かれた『五書文献史』選擇集篇の遺稿であるが、手にとつてみると、なんとよくまあこれだけ保存しておいたと思えるほど大量の廣告チラシを部厚く一束に綴じたものである。驚いたことに、中野氏は、その裏面を利用して細かい字で克明に原稿を書き入れて送られたわけである。きけば、當時不遇な中野氏は、赤貧洗うが如き生活環境にありながら、よく節を重んじて研學の一途に精魂を傾け、原稿用紙も買いととのえる餘裕のないままに、日々新聞に挾みこまれてある廣告のチラシをため貯えて、それを原稿用紙代りに使われたのであるという。内容もむろん長年苦心蒐集せられた貴重な文獻史ではあるし、われわれは頭の下る思いでその原稿を編輯したことであつた。淸貧に甘んじて地味な宗學の研究に沒頭している宗門學者の少くない中に、中野氏の如きは、正にその代表ともいうべき人であろうと思う。

また、紙の節約についてはこんな想い出もある。

話が私事にわたつてまことに心苦しいが、私の祖父は、やはり昔流の節約家の一人であつた。學歷は大してなかつたが、生來學問好

きで特に歴史にくわしく、布教に巧みであつたので、田舍の能分寺に住職して、その地方の布教家としては一應名も知られていた。

この祖父が、物を大切にすることは人一倍であつたが、とくに紙の節約では中々感心することも多かつた。

祖父は、お布施の紙や袋を、字のかいてあるのとそうでないのとに分けて整理し、半紙はいわゆる數延紙として、常に坐る座布團の下へ丁寧にシワをのばしてしいておくのであつた。そして、きれいな紙は二度の用に立て、汚れたのや字の書いたものは、またそれぞれ裏返したり、包紙にしたりして結構つかい道を工夫した。

私が感心したのは、いつだつたか、字のかいてもう役に立たぬ反古紙としか思えないような和紙ばかりを丹念に選り集め、それでコヨリを作つては、次々にそのコヨリを繼いで、一かたまりのヒモだまにし、暇があるとそれでせつせとなにか編んでいた。別に氣にも止めずにいたところ、祖父はいつの間にか、コヨリで「汗とり襦袢」を編み上げていたのである。夏のあついお盆の頃、棚經廻りやお施餓鬼の導師をつとめるのに、祖父はその襦袢を着て、涼し氣に人にも自慢していたが、紙もここまで使いこなせば、まことに冥利につきるというものであろう。

戰地に出征していた頃、上官から、「貴樣らはケツを拭くのに切手一枚の大きさで足るんだゾ」といつて叱られたことがある。また、一時、佛印のサン・ジヤツクという港にいた頃、日本軍の捕虜として働いていたフランス兵が、仕事中大便に行くのに紙がなくて、その邊の大きい木の葉を二、三枚ちぎつてゆくのを見たこともある。

そんなことを思えば、今の日本は紙がフンダンに使えて、有難い限りであるが、あんまりありがたすぎてとかく一枚の紙を大切にしないきらいがある。

むかし、敬佛房という念佛行者は、「後世者の法文は紙一枚にすぎぬなり」といつた、ということが、法然上人やその弟子たちの警句を集めた『一言芳談抄』という本の中に出てくる。その意味は、いうまでもなく、出離生死を願うにはいくら學問を博くつんでもだめで、修行の肝要な點は、わずか紙一枚に記すだけで足りる。つまり、かの一枚起請文や一紙小消息のように念佛を申すだけで充分である、というのである。ところが、この「紙一枚」が中々思うように實行できないのが、ひろく現代人の悩みでもある。われわれは、一枚の紙をムダにしないと同時に、その紙一枚にこもる法文の味を、深くかみしめて「現世をすぐべき用」としたいと思うのである。

近頃、一にもアメリカ、二にもアメリカといつて、渡米熱にうかされている日本人も多いようであるが、紙一枚さえムダ使いをせず、大切にするアメリカ精神に感心して歸つて來た人は、まだきかない。

一枚起請文の元祖をもつ日本人より、アメリカ人の方がよほど一枚の紙の尊さを知つているのは、皮肉でもあり、残念でもあるような氣がする。

熊谷二郎直實法師、京都より參向す。往日の武道を辭し、來世の佛緣を求めてより以降偏に心を西刹にかけ、終に跡を東山にくらます。今度將軍家御在京の間、所存あるによりて不參す。追て千程の嶮難を凌ぎ、泣く泣く五內の蓄懷を述ぶ。仍つて御前に召し、先づ穢土を厭離し、淨土を欣求する旨趣を申す、吾妻鏡に見える熊谷蓮生坊と將軍賴朝との對談の一條である。直實が、黒谷の法然上人に

熊谷發心

師事して淨土念佛者としての道を辿つた後半生は、彼が當時名うての武人であつた前半生と對比して殊に有名なことである。

直實發心の機緣は、須磨浦で紅顏の若武者平敦盛を討つて、無常を悟つたのにあると、平家物語はつたえている。一轉黒衣法體へと向つたその轉機として物語の、演劇の、題材としては、これは好個のものでもあらう。

だが、吾妻鏡はこの直實發心の直接の轉機をそうはみていない。

早旦、熊谷次郎直實と久下權守直光と御前に於て一決を遂ぐ。これ武藏國熊谷・久下の境相論の事なり。直實武勇に於ては一人當千の名を馳すと雖も、對決に至りては再往知十の才に足らず。頗る御不審をのこすによりて將軍家度々尋ね問はしめ給ふ事あり、――と

今も熊谷に近く久下堤というのがあり、先年のキテイ颱風に潰えて一帶を水浸しにしたがその久下の地と熊谷領との境界爭である。久下直光は直實とは緣戚關係にはあるが、現實にはこうした爭は血緣を超えて執拗にくりかえされること、今も昔も相同じい。賴朝の面前でのこの兩者の對決は、武豪の名には隨一の直實も武辯訥々として、却て誤解さえも招きかねない。しかし直光のバックには辯口達者の古狐梶原景時がついている。問題の爭點が微妙になつてゆくと、直實のような人間は段々腹の虫がカンシャクを起してくる。カンシャクは理路を超えてとび出しかねない。そこが武骨者、一こくものの眞姿である。小理窟こねて何が分るか、と思ひ出すと、もう我慢がならない。證文だ何だとそれが何の役に立つか、と思ふと、折角持參した證據書類をムヅとつかむと、バッと將軍の簾の中に投げこみ、ガバとその座をけつてとび出してしまつた。

なほ忿怒に堪えず、西侍に於て自ら刀を取りて髻をはらひ、則ち南門に走り出で、私宅に歸るに及ばずして逐電す。

という始末になつてしまつたのである。

驚いた賴朝はあわてゝ八方彼を探し出して慰留しようとしたが及ばなかつた。やがて、二週間ほどすると、伊豆走湯山の專光房から直實が上洛するのに出逢つたと傳えてきた。しかしもう法體になつているためとても引留めることも出來ず、しづかに淨土の法門などを談じたに過ぎなかつたと言つている。

箱根路を越えて京への道を急ぐ直實の心には、京へ着いたら法然上人のもとへと、それだけが描かれていたのだろう。

出家の動機としては一谷事件の方が、何かほのかな夢がある。財產爭ひとあつては餘りに現實的すぎる。だが、武骨もの、融通のきかぬ一こく者の直實にとつては、この方が適わしい轉機のように思われる。そして信仰に於てもたしかに彼は一こくものだつた。

老婆・念佛・子供

須藤隆仙

街を歩いて居ると何處からともなく老婆の一群が相和して唱ふ御詠歌の聲が流れて來た。私は思はず自分の服装を見直した。衣、袈裟、珠數、「私は一體今何處へ行くのだろうか。お檀家へ祥月命日のお參りに行くのだ。」心の中で獨りこんな事をつぶやきながら足取りをゆるめた。

あみだぶと　申すばかりを　つとめにて
淨土の壯嚴　みるぞうれしき、

流れて來る御詠歌の節に合せて、元祖大師二十五靈場の一節を低い聲で唱へながら風に運ばれようとする袈裟をソットおさへる。

瞬間ハッと思つた。向ふから來た自轉車の上の白い開襟シャツの青年が私の顔をのぞき込む様にして過去つて行つたのだ。ポックリ〳〵と御詠歌の節に調子を合せながら歩いて居る私を奇異に感じたのであろう。

私の住む街は北海道では屈指の都市である。電車や自動車の響の中にまさか御詠歌の尊嚴な旋律が仲間入りするとは、夢にも思つて居なかつた。

白い壁、グリン色の屋根の尖塔からひゞいて來る鐘の音に、總ての若人がぞよめき立つて聖母マリアの像の下にひざまずく姿を、たのもしくも又物淋しくも感じて居る私に取つて、風にゆれる墨染めの袖を何かしら恥しく思つて居たのも、祕し切れない事實であつた。

大部前の事ではあるが、或る老僧に私は聞いて見た。

「お念佛を唱へると云ふ事は自分では本當に有難い事だと思います。そして努めて唱へる様に致して居ります。だがお念佛を唱へる人はほんの僅かで現代の大半の人々はお念佛など唱へなくとも立派に生活して行つて居るのではないでせうか。私も近頃何んだかお念佛を唱へなくとも幸福に生きて行ける様な氣がする事があります。それに又お念佛を唱へて居るのが特別な限られた人間であるかの様な氣がして時々恥しくなるのですが一體どうしたものでせう？」

老僧は微かに笑つた。そして靜かに口を開いた。

「お念佛は無理に他から強いられるものでもなければ又お前への重苦しい義務でもない。唯お前自身が元祖のみ教を信じ西方淨土を願ふ時自づから涌出るものでなくてはならない。又元祖が『淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生まると知るべし』と仰せられた如く、恥だとか見栄等と云ふ飾氣を無くした時、始めてたやすく申す事が出來るのだ。

自分以外の人を自分より幸福だと思ふのは誰でも同じ事で、畢竟愚かた我れ〳〵のひがみに外ならない。お前以外の人がお前を見た場合やはりお前を幸福だと云ふ事であろう。又假にお前以外の人が、お念佛を唱えずとも、幸福に暮して居るとした所で、その幸福はたやすくお前に通ずるものではない。他に幸福な人が多ければ多い程うれしい事ではあるが然しお前自身は、私自身は念佛する事によつて、み佛から幸福を頂くのだ。

此の世の中で何が一番眞實味のある事か、そして何が一番幸福かと云ふ事を考へて見給へ。

お念佛は、老人にのみ其の妙味を味ふと云ふ様なものではない。子供も青年も壯年も老人も總ての人が皆其れぞれが立場から敬虔信受出來る尊いものなのだ。若いお前は若いなりのお念佛を稱へ給へ。すれば決して恥ずかしく思つたり、ひがんだりする事はないよ。」

私は默つて頭をさげた。そして私なりのお念佛を唱へる事を誓つた。

◇

こんな事もある。み魂まつりを催す爲、連日舞踊の練習に來て居た子供達がボク〳〵と木魚をたたいてお念佛を始めた。

「ナミヤミダブツ　ナミヤミダブツ」

昨夜練習中に突然停電となつて、子供達が驚いて叫び聲を上げた時、日曜學校の先生から「お念佛を唱へてみ佛様を拜んで居る子は決してこんな事で驚いたり致しません。普段から皆さんがみ佛様を拜んで居たら突然こんな事があつても、み佛様が必ずお守りして下さいます」と云はれて始めたものらしい。それが動機となつて舞踊の練習をする前に大きい子が木魚をたたいて念佛を唱へるのである。

子供は子供なりの念佛……。

私はこう思つてうれしかつた。おそらくあの子供達は何の理くつもなしに、何の野心もなしに、唯、夜怖い時に佛様にお守りして頂いて怖くない様にと思つて唱へて居るのである。本當に可愛いゝ無邪氣なそして尊いお念佛だと思ふ。

◇

文字を讀めない老婆が

「御詠歌を覺えようと思つて居りますが字が讀めぬ爲覺える事が出來ず殘念で殘念でなりません。」

と私に語つた事がある。

「いや、お婆さん、御詠歌を覺える事が出來なくとも唯南無阿彌陀佛と唱へる事さへ出來れば、充分じやないでせうか。お念佛が一番尊いのですから。」

「いや、もつとも〳〵。」

老婆はポックリと涙をこぼした。他の人々がいと樂しげに唱ふ御詠歌を自分が出來ないの

芒

鳥居良禪

秋になると
燈籠に灯を入れぬ夕がいく日かつづいた
山かげの墓地のあたりに
いちめんに曼珠沙華が咲き
やがて
野分が芒の庭を洗つた

は此の老婆に取つては耐えられないものがあつたのであろう。然しそれにも増してその無智な自分にも出來るお念佛、然も一番尊いお念佛は老婆に取つて涙の出る程有難い尊いものだつたのだ。

字を讀めぬ老婆は老婆なりのお念佛……。

子供は子供なりのお念佛……。

私は私なりのお念佛……。

それ〳〵が其れなりのお念佛を唱へると云ふ事を限りなくうれしく感じたのも此の頃からであつた。

◇

佛教は決して衰へては居ない。

若人が其のロマンチックなものを以て宗教と云ふものに臨んだ所で決してそれは永續性のあるものではない。お念佛が特定な年齢層にのみ通ずるものであるならば、若い私にも純心な子供にも餘生幾許も無い老人にも〃唯ひたすら唱ふ〃と云ふ普遍性をもつて展開してはくれないであろう。

然しお念佛は誰にでも稱へ得るのだ―。

たま〳〵街に聞く御詠歌の聲に私は何か知ら心の底に涌出る樣なものを感じた。そして感銘深き念佛に因む色々の出來事を連想させられた。

松岡讓の「法城を護る人々」と云ふ小說の題名が何度も何度も胸の中で讀返へされる。

佛陀の法燈は未だ消えて居ない。念佛を唱ふる私と、あの子と、あの無學な老婆と、其してあの御詠歌を唱ふ人々と、シツカリ手と手を握り合つて〃法城を護る人々〃となるのだ。

本會發行の「お十夜の話」はお蔭で、好評の中に全部申込賣切となりました。印刷の關係上再版できませんので一應絶版とし、次回には增訂版を出刊いたします。

月刊　**淨土宗新聞**

一部三圓、年七十二圓送共

興味ふかい信仰記事、時の動きなど豐かな編集、御愛讀をおすゝめします。但し、申込は東京都港區芝公園二

淨土宗教化團中央本部へ直接に

振替東京六一九三九番

慈心相向

他から誤解をうけたり、親切に世話をしてあげて、却てうらまれたりする。これ世間にありがちのことであります。そういうときに腹を立てたり、うらみがえしたりするのも風情やむをえぬ姿ですが、それであつては、どちらも助かりません。「怨みに報ゆるに怨みを以てすれば怨み消えず」です。

うつ人もうたるゝ人ももろともに
如露亦如電應作如是觀　良寛和尚

打つたうたれたといつて、滅びゆく世間に於て滅びゆくことに、懸命になつているが、それは何れもみな露の如く、電の如きもので、滅びゆくものであります。されば、いかり、うらみを超えて、打つ人も打たるゝ人もない、滅びない眞實の世界（常住眞實、卽ち涅槃）を求めなければなりません。

その常住眞實の世界に生きることが南無阿彌陀佛です。み教えのまゝに、南無阿彌陀佛と申せば、如來の慈光を蒙り、怨親平等に慈心をもて相向うことが出來るようにお導き頂けるのです。

（藤井實應）

拜む人拜まれる人

藤井實應

和尚は毎日どこからか必ず美しい花をとつて來ては之を中堂の藥師さまの前に供える事を、何年となく續けて一日も缺かしたことがなかつた。始めには誰が毎日こんなきれいな花を供えるのであるか人の知らぬ間に供えてあるのでわからなかつたが、後になつて和尙の供へたのであるといふ事がわかつたので、慈覺は特に和尙に目をかけるようになつた。だんだん修行をつんで師の慈覺が

「相應和尙は叡山の生きた不動明王だ」

とまでほめられる程の人になつた。彼は比叡山上の絶景の一と稱せられる無動寺を開いたのである。

和尙はまた北嶺行門の祖だといはれてゐる、行門といふのは修驗道のことで、正しくいへば、比叡山の峯谷々を廻つて、山中の一草一木すべてこれを靈山淨土のすがたであると拜みまわるのである。

山がそのまゝみ佛の姿であり淨土であるとする山の信仰である。回峯行といふのは和尙から生れたものである。

常不輕菩薩が常に人を敬ひ、人を輕んじないで、どの人にも其人の內にひそむ佛性の尊さを拜むことによつて、法華行者の美を盡す

常不輕菩薩は一切の人々を禮拜せられた。

「我は汝らを敬う、決して輕んじない、そのわけは、汝らはみな菩薩の道を行じて、佛となることが出來るからである。」

と、どんな人に對しても禮拜せられた。時に心よからぬ者共があつて、悪口をいつたり、罵つたり、或は石をなげつけ、杖でなぐつたりなどした。すると一たん逃げてこれを避け、遠くの方から大きな聲で

「我は汝らを敬ふ、決して輕んじない、汝らはみな佛になれる。」

といつては、また禮拜せられるのであつた。一切の人々を輕んずることなく、常に敬つて禮拜せられたので常不輕菩薩といはれたのである。（法華經）

平安朝時代九世紀から十世紀へかけての頃、相應和尙といふ人があつた。和尙は少年の時から常不輕菩薩を憧憬してゐた。叡山で修行し、あの名高い慈覺大師の教をうけた。和尙が特に師匠の慈覺から見出されたにはこんな話が傳へられている。

ことができたやうに、和尚はこの人を拜むことから更に進んで山をも拜んだのである。

人を拜むことのできるのは何と尊いことであらう。

山を拜むことのできるのは何と美しいことであらう。

花を摘んで佛を供養する美しい心は、又山川草木を拜むまでに至つたのである。

和尚については今一つ得度の美談が傳へられてゐるから、序でに記しておこう。ある夜、中堂に和尚が宿直してゐると、夜中に一人の沙彌が佛前に來つて、五體投地の禮拜をつゞけ、涙をながして一心に祈誓をこめてゐる、何をそのように祈るのであるかと耳をそばだてゝ聞けば、早く得度したいと祈つてゐるのであつた。その殊勝さを見た和尚は、今度自分が度者にあげられる恩命に浴してゐるのを堅く辭して、その恩典を拾てゝ夜半の祈をさゝげた其の沙彌にゆづつた。其夜の夢に藥師樣が示現して。

「汝は自分がまだ得度のできてゐない身であつて、早くも人を度した。」

といつて和尚の願を報ひられ、その後まもなく彼も、めでたき得度の機會を得たといはれる。

德川幕末の良寛和尚も常不輕菩薩の崇拜者であつた。常不輕菩薩禮讃の詩がある。

○

朝に禮拜を行じ暮に禮拜す
たゞ禮拜を行じて此身を送る
南無歸命常不輕
天上天下唯一人

○

斯人以前、斯の人無く
斯の人以後、斯の人無し
不輕老兮不輕老
我れ人をして長く淳眞を慕はしむ。

子供らとマリをついたり、かくれんぼうをして遊ぶことのできる淳眞無我の境地は拜みに拜む中から生れ出たのではなかろうか。

淨土宗の第二祖、聖光上人は「我が大師釋尊はたゞ法然上人なり」と申されて師法然上人を拜まれた。親鸞上人も

智慧光の力より
本師源空あらはれて
淨土眞宗を開きつゝ
選擇本願のべたまふ。
曠劫多生のあひだにも
出離の强緣しらざりき
本師源空いまさずば
このたび空しくすぎなまし

と讃嘆し、

「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」
と尊敬し、追慕し、拜んでをられた。

藤原兼實公も法然上人に歸依し佛の如く崇敬せられた。

元久二年（一二〇五）四月三日法然上人が兼實公の月輪殿に參つて、數刻法談をして歸られる時、兼實が崩れるようにして庭の上に降りて、上人を拜し、額を地につけて、やや久しくあつて後、起き直り、涙にむせびながらいわれるには、
「上人が只今土を離れて虛空に蓮華を踏んでお歩きになり、うしろに頭光が現はれておいでになつたのを見なかつたか」と。
右京權大夫入道と中納言阿闍梨尋玄の二人が御前に居たけれどもそれを見なかつたということである。

それは兼實公が幻覺を起して法然上人を佛と拜んだのであろうなどと淺い解釋をしてはならない。關白といふ重責にあつて時代の苦悶を一身に負うていた彼の不安苦惱は深刻なものであつたろうと思われる。彼が上人によつて、ほろびゆく世にほろびざるの道が與へられ、現在當來如來攝化の中にある大安心の境に敎へ導かれたことは、いかほどのよろこびであつたろうか。惱めるわれを、不滅の道に敎へ導き育てしものは、われにとつて佛である。師法然を佛と拜みえたりし兼實公の信の眼の明かなことも有難くうかゞへるのである。

師を佛と拜める人は佛を見る心の眼の開けた人である。

弟子や信者から佛の如く敬はれた法然上人は常に絕えず拜んでいる人であつた。「我は十惡の法然、愚痴の法然」と己を空しうし一日に六萬、七萬の念佛、常に阿彌陀佛を拜んでおられたのである。そしてこの本願の念佛一行に進みえたのは唐の善導大師のおかげであるとよろこばれ、「偏に善導一師に依る」といわれ、「善導はこれ彌陀の化身なり」と仰がれた。

佛の如く拜まれた法然上人は、佛を常に拜んでいた人である。

大正十年であつたと思ふ、私共は增上寺で加行をした。堀尾貫務僧正が遷化してまもない時であつたので、傳法には山下現有僧正が京都から老體をひつさげてお出で下された。百三歲までお生きなされた方であるから、その當時の九十歲頃はまだ自分で杖をつきながらお歩きなされた。ある時何かの用事で增上寺をお出かけになつた。その頃にはまだ珍らしかつた自動車にお乘りになつて出かけられ、やがてお歸りになつた。加行僧たちは玄關の兩側に並んでお念佛申しながら送り迎へをした。そのお歸りの時私も加行僧の一人として念佛申しながら前の方でお迎へした。鶴の如きお姿の現有僧正は、腰が少しまがり、右手で杖をつきながら自動車をおりられた。やがて玄關に上られると、前列の方にをつた私の直前に立たれて、「御苦勞さまです、南無阿彌陀佛」と實にていねいに頭を下げられた。ほかのこと考へながら念佛してゐた私はハッと氣づくと同時に

思はず頭が下つて何とも有難くなつたことを覺えてゐる。

そして最終傳法の日、傳法の儀式も一應おわつて最後の時「私はあなた方を濟度しようなどといふ不遜な考は毛頭ありません。たゞ法然上人のみ教をお取次ぎしただけです。私は、みなさんのお姿が念佛を申し、他にも念佛をすゝめられる菩薩さまに見えるので、お念佛をとなへて拜ましてもらひます。」と申されてお十念を下された。その時、餘りの有難さに思はずひれふして泣いたことを三十年の後になつた今日も、まざまざとまのあたり見るが如く思ひ出せるのである。

當時生き佛の如く崇められた現有僧正は日々休む間もないほどお念佛を申しつゞけられ、み佛を拜んでをられたのである。

拜む人は拜まれる人である。

拜まれる人は常に拜んでゐる人である。

拜むといふことは、己を空しうすることである、無我になることである。

「我」があつてはおがめぬ。拜めないのは「我」があるからである。己れを空しうする時に、みめぐみは身に滿ちて、ありがたい心が底からわきでゝくる。

己を空しうし、「我」の無くなつたところにみ佛ましします。

拜みに拜むものは遂に拜まれるものと一つになる。

一心になむあみだぶといふ人は
　　これぞ佛のあとのみほとけ

と古人も教へてゐる。

なかなか拜めぬ私である、「我」があるからである。「我」があるから一層拜まねばならぬ。もつともつと頭を下げきつて、拜めるように一切の人々を、事を、物を、更に山川草木悉皆拜みうるようにならせて頂きたい。南無常不輕菩薩。南無阿彌陀佛。

新會員紹介

會員の方々の御紹介、或いは直接御申込などで、相次いで新しい會友の方々を迎えることが出來ますことを、喜んで居ります。市販されず、また特に宣傳もしない本誌は、それだけに地味に堅實に、信仰に結びあつた方々の心の糧となつてきています。今月の新しい會友は左の方々です。（敬稱略）

愛　知　松壽寺

北海道　吉田智香子　須藤サツ子　藤井　章
　　　　　津田政雄　伊藤理子　山本文惠
　　　　　柴田マサ子　植原敏子

東　京　大久保連次郎　鈴木　一

埼　玉　佐藤好之助　米山まち子

大　阪　福野一枝

京　都　石川藤榮

福　井　月　泉　寺

淨土の會員を一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「淨土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にゼヒおすゝめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇ものごとすべて、こわすことは容易でも、建設は仲々困難なものです。先月刊行のおくれは、ハッと思つているうちに現われてしまつたのですが、さて發刊をとり返そうとすると、順押しにものごとの手順が狂つて、今月もかくの如き次第、何ともお詫びの他ありません。

◇仙臺での宗學大會は布教大會をかねての催しだけに豫想外の盛況の模樣です。本會關係の諸先生方も、紅葉の仙臺に赴かれ、私ひとりが都合で行けなくて、とり殘された形で、留守を守つています。事務所の前田龍海君は、この機會に大いに東北人士に、本誌の眞價を知つて貰ほうと、張り切つて出かけました。そう言えば同君には歸京すると、早速新人生へのおめでたが待つています。慶祝至禱。

◇吉田先生、沓掛の山莊から玉稿をお送りいたゞけました。江上秀静先生、古い讀者の方々にはおなじみです。福岡で本會の發展に御支援頂いていますが、滋味のあるお話、實際談だけに、じつくりと肯かれるものがあります。

◇灯火親しむ、など〻些か陳腐な感がしますが、やはり讀書は秋灯の下が、しみじみとするのには變りありません。傳道に御多忙の藤井實應先生のお話、私たちお互に合掌しあう心を些かでも忘れなければ、眞の平和は、たしかに問題なしにもたらすことが出來るでせう。なほ近く先生に「一枚起請文の話」を御執筆頂くとともに、トラクトとして近刊したいと考えています。御期待下さい。

◇實田正道君、御勤務の中に實感されての話、私たちの身邊には、顧みれば實にさまざまの問題が、教訓がある。たゞ少しでも目がそうしたものをみる正しい角度にあるかどうか。色めがねの流行る世の中では。須藤君は正大の學生。

◇會友の方からいろいろ希望意見が相次いでいます。新しい意味での經典解題大實現させてゆきたいと企てゝいます。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」十月號

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和廿六年九月二十五日印刷
昭和廿六年十月一日發行
（定價貳拾圓）

編輯兼發行人 眞野正順
東京都千代田區神田神保町二ノ十
印刷人 春山治部左衛門
印刷所 共立社印刷所
東京都港區芝公園五ノ一〇
發行所 法然上人鑽仰會
振替 東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

信仰を求める人
宗教を知らんとする人 必讀の書

現代人の混迷せる意識にはつきりと方向を與える

大正大學助教授
竹中信常著

宗教への思慕

―現代人の宗教概論―

價百二十円 送三十円
A5版百頁 鮮明謄寫

暗澹たる人生行路に輝かしい信仰の燈火を點ずる

社會科教師用テキストとして最適

申込所 東京都港區芝公園五の十
法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある裝釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價―浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話 藤田寛雅著 賣切
お彼岸の話 竹中信常著 四圓送六圓
お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行） 昭和二十五年九月廿五日印刷 昭和二十五年十月一日發行
第十六巻 第十號
定價 金貳拾圓（送料三圓）